

Title	佛蘭西革命前後(中村善太郎著, 改造社發行)
Sub Title	
Author	平山, 榮一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.14, No.4 (1936. 3) ,p.168(706)- 169(707)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360300-0168

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

佛蘭西革命前後

(中村善太郎著)
改造社發行

東北帝大教授たりし著者が講義案として纏められてをいたものを著者の歿後遺稿として出版されたものである。大類氏の序文にある如く、本書はフランス革命に重點を置きナポレオンの制覇時代にまで及ぶ近世君主專制政治の歴史であり、他面に於て政治思想史ともなつてゐるのは、著者の態度、方法が如何なるものであるかを明瞭にしてゐる。普通に遺稿として雑然と諸論文を纂輯したものと異り、書き下しの論著の如き一貫した特色が見出されるのはこの理由によるのである。

第一篇は『近世に於ける專制政治とその學說』と題して、全卷の序説ともなり、著者の方法論の適用が見られる一篇で、マイネッケの政治思想史的立場の影響を受けて書かれたものと察せられる。先づ宗教改革に始まり、各國の政教分離より生じた君主權の發達とその專制政治への推移を概観し、併せて諸家の政治學說、政治思想を紹介論評する。清教徒革命とフランス革命との比較論など徹底せざる憾みはあるが、この一篇が實は全卷で最も興味あり光彩に富む部分である。つゞいて第二篇『フレデリック二世の政治學說』に於ては近世君主專制政治の事實及び思想の終末を代

表するものとしてフレデリック二世の啓蒙專制政治思想を論じてゐる。第三篇は『舊政治』と題されてゐるが、フランス革命の序説としてのアンシアン・レジームの検討よりも、革命を準備した思想家の研究に多くのページが與へられてゐるのは、上述の立場から來てゐるのであらう。第四篇『佛蘭西革命』は著者の研究の主體であり、序を追ふて革命の政治的事實が詳細に展開せられる。その方法ならびに解釋は大體に於て著者が『私淑せられた』オーラーのそれに據ると共に諸家の説も參考せられてゐる。邦文のフランス革命史に從來あまり紹介せられてゐない選舉及び選舉權の問題や輿論、新聞紙なども説明せられてゐる。三部會の開會より王政廢止、民主々義的共和國の建設を経て、それがブルジョア制度に移行するまでの錯雜せる諸事實は手際よく纏められてゐる。しかし本篇が著者の領分であるといふ事實は、他面に於て、多數の史料と諸説を採擇して革命の事實そのもの、敘述に溺れ、先行の諸篇に見られる如き批判が缺如し、思潮の主流が浮び出る餘裕の無かつた憾み無しとしない。恐嚇政治に對する解釋の如きも微温的で、著者はその結論を保留せるか若くは躊躇せる如き感がある。第五篇『ナポレオン』は『佛蘭西革命の主義、革命政府の政策はナポレオンの出現によりて全く一蹴し去られしに非ず、ナポレオンによりて繼承せられ宣傳せられたるもの』といふ見地より、ナポレオンの政治史的意義を論じ、その對外政策を中心にその活動を敘して全卷の結論とされてゐる。此處に於てナポレオンの諸政策は悉くフランス革命に起原するものであり、彼に創意は無く、たゞ時代の潮流に動かされたるものに外ならずとの

解釋がとられてゐる。されどこれは明かに異論の餘地があり、フランス革命の民主主義的原則とナポレオンの専制政治との相違を明かにせるオーラーの所説とも一致しない。

要するにフランス革命史専門の研究書としては右の不滿を禁じ得ないが、要領よく概括せられた近世歐洲政治史として一貫せる見地から述べられてゐるところに本書の價値が存するものと信ずる。本文四百二十頁、詳細な索引が附せられてゐるが、参考書目に出版年代の併記せられてゐないこと、問題の性質によるが前半殊に伏字多くして文義不通の箇所多きは一般向の参考書としてやゝ不適當なるをおそれるが、一般政治史、特にフランス革命史の研究方法の上に與へる示唆は決して少くない力作として推賞すべき好著である。(平山榮一)

西洋史研究第八輯(マキヤヴェリ號)

東北帝大の西洋史研究會は昭和十年度後期の事業としてマキヤヴェリの研究及び紹介を試みた。卷頭に大類伸氏の「マキヤヴェリと時代」があり、次で金倉英一氏が「Vigilia」に現れたるマキヤヴェリの國家思想」なる研究論文をのせられ、更に平塚、村岡、森脇、石井、宮崎、齋藤の諸氏がマキヤヴェリの「君主論」、「羅馬史論」、「戰術論」、「フロレンス史」、「書簡」等に關し、それぞれ懇切丁寧なる解説を試み、また祇園寺、萩中、村岡の三氏がマキヤヴェリに關する近世史家の研究を紹介されてゐる。卷末のマキヤヴェリ研究文獻(金倉氏)年表(照井氏)と相俟つて完全な

一つの研究書にまとめられてゐることは誠に喜ばしい。ルネサンスの研究に缺くべからざるマキヤヴェリの知識を斯うした便利な姿で與へられると云ふことは西洋史研究者にとつて決して小さな喜びでは無い。昨年度西洋史學界に於て特に記憶せらるべき事業の一つであつたと言ふべきであらう。(近山金次)

雜誌『東洋史研究』の發刊

京都帝國大學文學部東洋史學科の卒業生を以て組織する東洋史研究會により、昨年十月創刊せられた「東洋史研究」は、その隔月刊行の豫定通り、十二月には前號にも増し充實した第二號を刊行せられたことを、先づ慶びたい。

東洋學・支那學の専門書は以前から存在したが、東洋史學の専門誌は本誌が最初であり、誇るべき古い傳統を背後に、新進氣鋭の二十數氏の結束は、必ずや斯界に清新の氣を齎すものと期待してやまない。

その内容目次は
創刊號

晉・趙の北方進展と山川の祭祀

森 鹿 三

漢代大私有地に於ける小作者と奴隸の問題

宇都宮清吉

最近五十年支那學界の回顧(アンリ・マスベロ)

内藤戊申譯

聖成吉思汗の家譜

山本守譯

第二號

漢代蒼頭考

宇都宮清吉